63

神戸おぼれ

淀川 長治 〈映画評論家〉

「昭和十二年ごろまだべんしありましたでェ」油井正一さんがそういったのでびっくりした。

「それがアン・サザーンとラルフ・ベラミィの〝八点鐘〟を朝日館で見ました」

だいたいアン・サザーンやラルフ・ベラミィなどというスターの名を口にする人はもういまい。そのうえ「八点鐘」というような映画の名を持ちだす人は……ああ「あんただけや」と私は溜息をついた。これはコロムビアのB級作品だったと思う。

しかしである。昭和十二年ごろ……話が合うのである……「八点鐘」はお船の映画でそのころのまちがいもない映画。すると昭和十二年……まだ朝日館はべんしがいたのか！

昭和四年にトーキー本格登場。昭和六年「モロッコ」からスーパーインポーズ（字幕）。日本はこのあいだ亡くなった田中絹代さんの五所作品「マダムと女房」これが昭和六年。初トーキー。

トーキーで一番カンゲキしたのは何か！私は恥づかしいが西部劇トーキー第一号の「懐しのアリゾナ」の牧童が料理中のベーコン・エッグのニュルニュルニュルジューというフライパンの中の音。よだれが出かけた。

そして日本映画では「マダムと女房」で田中絹代がエプロン姿で台所でカツオブシをけずるガリガリシュリシュリ。その音。

ところでジャズ評論家の油井さんとどうしてそんな話が出たかというとラジオ関西二十五周年記念で神戸に呼ばれサンチカのサテスタのガラス窓の中で金魚みたいにみんなの見物客に眺めながらしゃべるはめになったときのこと。油井さんも旧制三中私もその三中。私の方が八年くらいセンパイ。

問題はその神戸に来て私は昭和十二年に朝日館がまだべんしを用いていたことを知ったというまぎれもないこの事実であった。そして二人は新開地の話から三の宮のバンコクカンの話から金魚がウンコをひきのばすごとくしゃべりまくった。約三〇分、そこへ藤岡琢也さんがとびだして「これから三人で神戸をぶらつきまほか」「ワーッええわ」でこのタイムは終る。藤岡さんは姫路の人「あんた、姫路のあなごおいしいわ」やっぱり食いもの

油井正一さん〈右〉とおしゃべりする淀長さん

の話。この藤岡名優かつてはテレビ洋画のアテレコでミッチー・ルーニーをやったりしたというカンゲキ。私の好きな俳優さんだ。サテライトのガラスの前はいっぱいの人だかり、中から見てつくづく感激したのは「ああこのひとみんな神戸の顔や」ということだった。神戸の顔というのがある。東京に三十年以上暮らすとそれがわかるのである。それがすんで私は司会の河野春美嬢ともう一人の国鉄青年と三人で（ハイウェイ）へ。このレストランむかしは生田筋にあって私の家があきなっていた美術品商（エヴァンタイ）と隣り同士。御主人は逢えば懐しがって涙をためて私を見つめてくださる。『西洋の映画の本をいつもわたくしの店にかくしといてやと五冊も六冊もあづけられとった』私はその記憶はない。しかし思い当った。アメリカの映画雑誌をエヴァンタイに持ってゆくと、私の姉がその写真をハサミでこれ切らしてと切ってしまう。ベティ・カンプソンの鏡台、ディートリッヒのハンドバッグ。なんでも姉はハサミで切ってそのとおり作らせてしまう。油井さんが『あのお姉さん死にはったか』という。そして『エセル・マーマンそっくりやった』とつけ加えた。なるほどよく似ていた。「おかしなおかしな、おかしな世界」のあのうるさい女そっくりだった。

ラジオ関西25周年記念番組サテスタで。左河野春美アナ

その晩オリエンタルに泊って、あくる朝、須磨のラジオ関西で河野嬢と二回ぶんおしゃべりをマイクの前。その足で須磨寺へ。きれいだ。桜がピンク色満開三日前。亡き母の墓へ詣る。「ほんまやテレビのひとや」と顔を見て「お手つだいしまほか」と娘さんお母さん弟さんらしき三人。神戸はええ人ばっかり。

須磨寺から須磨の海へ歩るく。海……いいねェ神戸ちゅうとこは！　子供が釣りをやっている。「おっちゃん、いつ来たん」晴天午後二時の須磨の海。四月一日。ゆるやかなリズムを打つその波。ああいいぞ！

あわてて車でダイシンビル七階。エレベーターでセブンアップ。『きゃー』これが編集部小泉さんの第一声。こっちは締切の原稿を書いとらんのでおわびのテレ顔。「ゆんべホテルへ電話しましてんで」「知ってます。そやけど……」というちに汽車の時間。出かけに『これ聞きなさい。神戸の歌と音楽よろしまっせ。ムードがあんねん。』LP一枚を押しつけられる。『ワーッ聞きたい』別れて車で新神戸駅。下りしなに運ちゃんが「見てまっせ、聞いてまっせ」でその運ちゃんと握手したのがいけなかった。レコード……タクシーの中へ置いたままとび出してしまった！　あと三〇分。布引へゆこ。二日前の雨でそのめんダキおんダキの水あふれる美景。ここがまた桜満開三日前。ピンクの雲や。神戸はええわ。四時四分に着いて四時十六分発。昨日今日まるいちにちの神戸。神戸空気でおぼれてしまう。みどりが若く海は青い。帰ったら電話。『あんた誰』『堀江謙一だす』『どこから』『東京です』『なにしに来やはったん』『ボートショーで』『いま神戸から帰ったとこや』『ワーッ懐しい！』。

また電話。『なんです』『神戸から』『エッ』『神戸港ことしで一一〇年。その記念に五月十二日来てくれまへんか』。この日すでに用件があった。残念。しかしまあ昨日今日この神戸のなんたる匂い。

女体百景

58

保険の女

文とえ　細川　ただす

年の頃は三十なかば、小柄でぽっちゃりしたA子は、彼の行きつけのバーのホステスだった。女独特のネチネチしたところがなく、さっぱりして、どちらかというと男性的な性格に彼は気に入ってA子のなじみ客の一人になっていた。

男のいいなりには決してならない。イエスノーのはっきりした応答は時にはかんにさわることもあるが、するどいその目つきは、何か気がありそうに思えて、彼はA子の客になりつづけているというのがほん音かもしれない。

しかし、一方、そのするどい目の輝きは、ただならぬ海千山千の女を連想させ、手ひどい目にあってはならぬという警戒心が、彼の方から積極的に彼女に迫ることはがまんして来たのである。

どちらかといえば遠慮がちにチャンスを待っていたのである。こういう女は、向こうから出てくるのを待つに限るという彼の信念なのだ。

彼の期待は的中した。

「まあ聞いて下さいます？　私の身の上話？」

と、ついにそのチャンスが到来したようである。

「どうぞ、どうぞ、ぜひ聞かせて下さい」

と、彼はA子の手を強く握り返して言った。

その日は不思議に客の入りが悪く彼はゆっくり彼女を独占することが出来たのだ。

「私、実は主人が死んでから、一人息子のために、ヒル保険の勧誘をしてヨルこの商売してるんです」

「それはまた、大変な御苦労さんなことですな」

「いえ、働くのは親のつとめと思ってますから、別に苦労とも思いませんわ」

と、きっぱりいいきる彼女の言葉は、少しは疑えたがどうもまんざら嘘とは思えず、やはり同情らしきものがほのぼのと湧いてくるのは男心というものだろか？　彼は尋ねた。

「働くのが苦労ではなかったら、何が苦労なの？」

「いえ、やっぱり私、女ですから夜一人は淋しいわ」

「そんなことないでしょ？あなたほどの方は」

「いいえ、私、誰でも彼でもいやなの。私が好きな人でないと。そんな人に会えなかったの。だからもう主人が死んで以来、ズーと空家なの。長いこと使ってないの」
「そらいけませんなあ」
「よくないと思われるでしょう？」
「よくない、よくない」
「一度、お相手いただけます」
「いいですよ。おやすい御用です。
私、あの方は少々自信のあるものを持っておりますから、嬉んでお相手させていただきましょう」
「あら、すばらしいわ！　光栄だわ。そんないいものをお持ちだなんて」
「そりゃもう持続力抜群です。ちょっと負けませんよ」
「ああよかった。やっぱし私の思った通りだわ。私にぴったんこだわ。ほんとに、近い内にぜひ一度お願いね」
と、初めて知ったようなことをいいながら、その実、彼女は、事前に、彼の素性を何から何までよく調査した上で話しているのだ。
彼が持続力の強いという評判もちゃんと調査ずみなのだ。
そればかりではない。
金があって、大人のつきあいの出来る、後くされのないプレイボーイの中年の妻帯者で、その上、何といっても、あの方の力も抜群な絶倫男でなければならない。
しかも大口の保険にも充分はいってもらえそうな男でなければならぬ。
今日の客はその条件にぴったしだ。
彼こそカモなのである。

さて、二人は数日後、とうとうホテルへ行ったのである。
彼の思った通り、というよりは、想像を絶して、彼女は好きであり、絶倫だった。
疲れを知らず、彼女は求めつづけた。
すごい迫力であった。
さすがの彼もたじたじだった。
「ああ、いいわ！　久しぶりだわ。こんなにいい気持」
と、悶絶したかと思うと、つづけて
「今度は後へ廻って抱いて……いや、その次は、私が上よ」
てな具合に、つぎからつぎへと自分からポーズをとりながら、彼をリードして、たてつずけに三発ばかりバチョンバチョンと、違ったポーズで事をすませ
「ああ、よかったわ。有難う」
と心底、感にたえたように、よかった、よかったを連発した。
彼は、車代、ホテル代、食事代を支払ったがかんじんのあれ代は一文もいらんと彼女はいう。
何と有難い話だろう。
ああ、何といい女に出会えたものだろうと、つくずく感謝の気持さえ起って来た。
しかし一方、何年に一度という女の性のはけ口のお相手とあっては、さすがの彼も相当疲れたのは事実である。
彼ほどの持続力のある男でなければとうてい彼女のお相手は出来なかっただろう。
「よかったわ！　よかったわ！」
を連発する満足し切ったベッドの彼女のひざ元にとうとう彼はどっと腰を下してしまった。
そして、肩で大息をついた。
その時である。
「あなた。保険にはいって下さいません？
きっとはいって下さいますわね？」
という彼女の何とも甘ったれて、なれなれしい声が肩越しに彼の耳元でささやいた。

世界の福祉施設

欧米の心身障害者を訪ねて

橋本　明著　<カラー８ページ、本文320ページ、定価　1,000円>
<社団法人家庭養護促進協会事務局長>　送料 200円

●福祉時代の幕開けです。あなたも一冊ぜひどうぞ！

主な内容

- 神戸からシアトルへ
- クライシス・クリニック
- グッドウイル・インダストリーズ
- 里親発見活動
- フォースターグランドペアレント
- ファーストアベニュー・サービスセンター
- ボランティア・ビューロー
- 病院におけるボランティア活動
- レニア・スクール
- アメリカのグループホーム
- 社会福祉とPR活動
- 砂漠の中の老人の町
- ボーイズ・タウン
- パーキンス盲学校
- スポック博士の子供博物館
- アビリティーズ
- ロンドンのバーナードホーム
- 奇蹟の町・ルルドを訪ねて
- コペンハーゲンの老人の町
- ベーテル――西ドイツの障害者の町（ドイツ）
- ヘット・ドルプ――未来を拓くオランダのコロニー（オランダ）

各書店で好評発売中！

振替口座　神戸四五一九六

お申込みは月刊「神戸っ子」編集部まで。神戸市生田区東町113の１　大神ビル７Ｆ　ＴＥＬ(331)2246

★元町・南京町に本場中国料理店オープン

元町商店街浜側の「南京町」の西口に新しく中国料理の「栄和飯店」がオープンした。そう広くはないが別室もあり、明るく清潔な感じの店だ。

料理の味には定評がある

料理を担当している李昌冷さんは大阪の中国料理店「敦煌」で腕をふるい、朝日放送テレビの「料理手帳」で半年間指導をしていた人だから料理の味は、中国の船員が来て、これは本場の味だというぐらいに確かなものだ。

昼は定食をはじめ大衆的な料理を、夜は高級料理を手頃な値段で楽しめる。海鮮料理などもあらかじめ予約をしておけば注文に応じた料理を出してくれる。立食形式にすれば八十人ほどのパーティーもできる。

メニュー例
コース／五千九百円（ビール二本つき）コース（四、五人）＝前菜、炒三鮮（海老と貝類、イカ甘煮つけ）千炸双味（揚げもの二種類）麻婆豆腐（牛引肉唐辛子入りトーフ）旦花湯（玉子スープ）他にも、三人コース（三千九百円）、四、五人のファミリーコース（五千九百円）がある。
一品／紅焼牛柳（牛肉の一口テキ）油泡帯子（貝柱イタメ）紅焼牛脯（牛肉の角切り煮込み）
神戸市生田区栄町一丁目三―二
電話三九二―一九八二

★スペインの片田舎で飲んでる気分

スペイン風居酒屋「ニューサンマリン」（生田区中山手通一、中筋ビル2F）では、毎週月曜日には久保文明さんと川上卓也さんのギター二重奏、そしてその伴奏で川本真規子さんと福井るみさんの踊り（第2、4火曜日）と、あの激しくかつ内に秘めた感情を豊かに表現するフラメンコの演奏と踊りが楽しめる。狭い店内にはスペインの香り。何となくスペインの片田舎でチョット一杯という気になってくる店である。

熱気あふれる店内

★エトワの花祭り盛大に開かれる

シャンソン歌手の堀郁子さんのディナーショウが開かれた。題して「エトワ第2回花祭り――堀郁子ディナーショウ」。その日、三月三十日に、ニューポートホテル舞子の間には堀ファンが約二五〇人。富士原寛とエトワアンサンブルの伴奏によって得意のシャンソンを披露。また五月二十八日にリサイタルを開く堀郁子シャンソン教室の生徒たちも自慢の歌声を聴かせて拍手かっさい。食べ飲みそして踊ってと春の一夜をシャンソンと共に過ごした。

得意のシャンソンを

●神戸うまいもんとドリンキング

クラブ
飛　鳥
生田区中山手通一―一一七
（生田新道山側）
☎三三一―七六二七

クラブ〝飛鳥〟がグンとゴージャスに移転オープンして満一周年を迎えた。神戸の経済人をはじめ夜の三宮を愛する遊び心を知っている紳士の社交場として仲々の賑わいを見せている。

また、その向かいの姉妹店「ピコ・アスカ」もクラブとは違ったイメージをもつ〈小さな飛鳥〉として気さくな雰囲気とつき出しの小鉢物なども揃っていて、ドリンクと家庭料理が楽しめると三宮の新しい〝名所〟となっている。

おすし
てんぷら
榮彌

本店　大丸前・三宮神社東
TEL(331)5772
5673～4
(毎週水曜日休み)
支店　さんちか味ののれん街
TEL(391)5233
(第3水曜日休み)

営業時間
A.M.11.30～P.M.9.00

やっぱりうまい
むさしのとんかつ
トンカツ
ヨーベ三宮
ムサシ
でんわ：331－三七七一
321－〇六三四
321－〇六三五

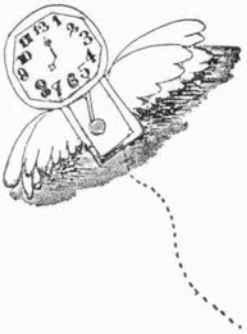
潜り戸を通って
"花"のおふくろさんの味を

●こん立て●
たかのり弁当
やよいの里
花そうめん
みむろそうめん
天ぷら
おつくり
湯どうふ

和風季節料理　花

11：30AM～8：00PM　月曜日定休
さんプラザ地階　☎331－0087

神戸百店会
だより



★服部メガネ店
さわやか新装オープン

旧居留地の明治中期から神戸はじめてのメガネを商ってきた「服部メガネ店」（大丸前／服部勝美社長☎331－1123）が、4月16日80年を迎えて、装いもクラシカルエレガンスに、ベージュの大理石のウインドー木の飾り柵には世界のファショナブルなめがねをコレクション。神戸のハイカラの伝統を受け継いで、シックな感じの雰囲気の中、専門店らしいファミリーそろってのサービスは行き届いていつも気易く応待ぶりも誠実そのもの。客層も巾広く、古いお得意さんも「プティックみたいにきれいやね」といいつつ満更でもなさそう…。専門店の風格と親しみやすさがあふれたオープン。サングラスシーズンに向ってあなたも立ち寄ってみては…。

新装オープンしました。皆でお待ちしています。

★装苑、藤井まつ子さんのパリ便り

オートクチュール「装苑」（大丸前本店）のデザイナー藤井まつ子さんが3月23日から4月7日までパリ、スイス、ミラノ、フローレンスというコースでヨーロッパを回ってこられた。

藤井まつ子さん

パリの町は真冬の寒さで人々はコートに身を包み、一番印象的だったのはイースターの時期だったのでカラフルなデコレーションの卵型のチョコレートがあちこちの店先で並べられていたことだったとか…。

パリではニナ・リッチのオートクチュールのショーを見、全体的にフェミニンなトーンでデザイン的には細かいプリーツが多く豪華な雰囲気でまとめられていたそうである。藤井さんはいつもパリでコート類等のパターンやトワールを買いそれを日本へ帰ってきて研究される。この冬は一枚仕立のコートが増々注目を浴びそう。

秋・冬物の仕入れはフローレンスで――ニットやドレス類を主に。パネル調のプリントが新鮮でした。

装苑では今から秋、冬物の準備にかかり、7月中旬には発表される予定です。

★オランダの景色とアイスクリーム

地下鉄新長田駅前のジョイプラザ大丸地下1階に菊水総本店のジャルダン〝アイスクリーム＆ホットドッグの店〟が4月21日にオープンした。カウンター形式に15席が並び、壁面にオランダのぶどう畑のスライドを使うなど一味ちがったデラックスなムード。シェイクもおいしいですよ。

●ショップトピックス

★北野クラブ
「淡谷のり子ディナーショー」
ブルースの女王淡谷のり子が来神。円熟味のある歌声を存分にお楽しみ下さい。
5月26日（木）・5月27日（金）料金10,000円（食事、サービス、テーブルチャージ、税金込）食事メニュー／スモークサーモンコンソメ、神戸肉のポワレ、サラダ、デザート、コーヒー
ショータイム／7時30分・10時
司会／千秋真吾
曲目／「別れのブルース」他
「雨のブルース」他
ご予約は北野クラブ☎078－231－2251まで

★コマツヤセンター街店、さんちか店では、4月8日より今流行の素材を店内一杯に取揃え、オーダーメードの註文会を開きます。お好みの素材、デザインそして手頃なお値段で思いのままも一人のあなたを表現して下さい。

★この夏、人気を呼んでいるのはビッグなギャザースカート。特に大胆な色使いの花柄プリントが多く、上にメッシュのドロップショルダーのセーターと組み合わせたり、スカートと共布で小さなベストを組ませると新鮮。**ベニヤエルベ**店では、クリスチャン・オジャール、レノマ、アルファキュービックなどの製品が揃っています。一万円から一万九千円まで。

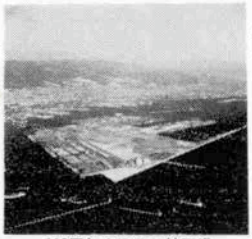
★元町通3丁目**サノヘ**本店のショウウインドウをご覧になりましたか？カラフルなロタのジーンズが目に入ってきます。レッド、パープル、イエローなど色の種類は今が一番豊富。エスカルゴスタイルのサンドレス（二万九千円）は楊柳で膚ざわり抜群。Tシャツ（七千円）は紳士サイズまで揃っています。デニム地のパーミューダー（一万六千円）やビキニ（一万六千円）などもう盛夏です！

ポケットジャーナル

★一一〇歳を迎えた神戸港

市民に古くから親しまれミナト神戸と唄われる神戸港が今年で一一〇周年を迎え、数々の催しが計画されている。

5月1日の日本丸と海王丸の帆船見学会では二万人を招待。



110周年を迎えた神戸港

祝賀式典は5月12日の午前11時よりサンボーホールで開かれる。港湾、海運、港運の関係者や在港の外国船の船長さんを招待し、港湾功労者の表彰が行なわれる

同12日より17日までさんちか広場では神戸港展〝市民と歩む国際港神戸〟と題して、今までの神戸港をふり返って写真パネルやモデルシップの展示、神戸港の模型が組まれる。

夏休みの7月下旬から8月上旬にかけて「フェリーに乗って大阪湾を見学する会」が予定され、神戸港から淡路島、泉州沖と回るコースで約三千人を招待し、楽しませてくれる。その他8月上旬に海上花火大会など一一〇周年にふさわしい行事がいっぱいだ。

★ARTWORKSHOP'77とは

ドイツと日本の文化交流の一つとして企画されたもので相互の国に滞在し、そこで作品を制作・発表する機会を持った5人の芸術家達（ヴォルツ・カーレン、マリアンネ・レーツェル、中村滋延、下谷千尋、クラウス・ミヒャエル・ライフェルト）によって行なわれた。

4月3日県民サービスセンター。在神ドイツ人など多数の国際色豊かな会場には下谷氏の現代平面、カーレンのビデオ、マリアンネの鉄の造形、中村氏作曲の演奏およびライフェルトの歌唱とプログラムも多彩。

（会場構成は枚田佳子）

この企画を担当した大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館の文化担当アタッシェー、フォルカー・ザイツ氏はこの6月に帰国してしまうということもあって、熱心にそして満足気に「ドイツと日本と、芸術家たちの真摯な姿に少しでも触れてほしい」と語った。

日独文化交流のひととき

★生田署新庁舎へ移転

兵庫県下の代表署の一つである京町筋の生田警察署（高井学署長）が、5月2日より中山手2丁目75―1（旧YMCA跡）に新築された新庁舎に移転する。現在の生田署は大正13年に建てられた古いもので壁面の損傷も目立ち、職員の数も

誕生日ありがとう運動

わたしの誕生日に読んだ新聞記事

前略　本日三月十九日で？才の誕生日を迎えましたので、わずかですが、切手で送らせていただきます。

悲しいかな今朝の新聞に知恵おくれの子が、十四年間も監禁されていたという記事が載っていました。

十四年間も……気の遠くなるような話です。近所の人は、このことを知っていながら、公然の秘密としていた、ということがひどいショックです。

まだ人知れず同じような待遇を受けている子がたくさんいるのではないかと思うとゾッとします。このような子を一日でも早く一人でも多く探し出して、保護することはできないものでしょうか。

わたしの誕生日に、このような記事がのったということも、なにか、わたしへのいましめのようにも感じられます。

わたし一人の力なんて、ほんとうに微力ですが、くじけずにがんばっていただきたいと思います。

（京都市　女性・会社員）

みなさん、このような事件についての、あなたの感想を、左記の当運動本部へお寄せください。

誕生日ありがとう運動本部

神戸市賀合区御幸通八―一―六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一―八一六一内線三一六

建設中の生田署新庁舎

三九九名と多くなったため移転される。新庁舎は地下1階（駐車場）地上9階建で、1階、2階は従来どおり、3階に交通販促センター、4階に機動捜査隊等が入り、6階には柔道、剣道の道場が設けられる。7～9階は60名収容の寮になる。1階には寛げる県民ホールもあり明るく馴染み易い雰囲気が特徴。6月初旬に落成式が行なわれる。現生田署は神戸まつりのあと取り壊され、東京銀行が建てられる予定。職員からは「愛着があるので名残り惜しい……」との声も聞かれた。

★これがホントのジャズの楽しさ

日本じゅうのデキシーファンが毎年楽しみにしている恒例の「全日本デキシーランド・ジャズ・フェスティバル」、今年は6月4日（土）4時半からオリエンタルホテルで開催される。今回で十二回目を迎えるが日本のジャズ発祥地神戸にふさわしく、多くのファンとともに育ってきたとてもハッピーでホンモノのジャズの雰囲気を持つフェスティバル。二、五〇〇円

話題のポスター

出演／薗田憲一とデキシーキングス、ニューオリンズ・ラスカルズ、フラット・ファイブ、ソネ・エスクワイア・ジャズメン、ビッグ・ディッパーズ、伊藤隆文とポッサリオ、水島早苗、津村昭、西代宗良、原田紀子ほか

★劇団「夜行館」5年ぶり生田神社境内6月小屋掛け

5年前、生田神社で小屋掛けし、鮮烈な血泥を観客に遺した劇団「夜行館」＜弘前市中野1丁目8ノ4主宰／笹原茂朱さん(38)＞が、再び生田神社の境内で6月11・12日の2日間、十和田湖に伝わる鬼人於松（おまつ）を題材にした芝居を披露する。

「夜行館」より

劇団「夜行館」は、一枚の巡礼地図をたよりに九人の劇団員が大八車を引きながら四国巡礼、恐山霊場の旅、津軽巡礼を、小屋掛け打って旅を続け、ついに津軽に住みついたユニークな演劇集団。生田神社の小屋掛けでほれこんで劇団員になった神戸生れのせりたか童子さんが今度のマネージャー。生田神社の福田宮司画家の中西勝さんなどごひいきも多く劇団「夜行館」の公演を成功させようと地元で実行委員会もできる熱のいれようだ。

＜お問合せ／月刊神戸っ子☎331 2246＞

★松本幸三氏渡欧さようならリサイタル

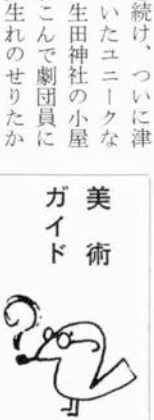
松本幸三（テノール歌手関西二期会）氏は、月二回月刊神戸っ子のサロン、神戸時代でミニ・リサイタルをひらき話題をあつめているが、この6月にイタリヤのミラノ、スカラ座に一年ほど留まり、歌の研鑽を深めることになった。

松本幸三さん

渡欧にあたって「さようならリサイタル」を来る6月6日午後七時より県民小劇場で開かれることになっている。会費千五百円。

なお、神戸時代のミニ・リサイタルは5月11日(水)と5月24日(火)の午後7時より開かれる予定でご参加

美術ガイド



★兵庫県立近代美術館
橋本関雪展 4／23～5／22

★南蛮美術館
南蛮紅毛美術展 4／2～5／29

★白鶴美術館
中国陶磁 4／21～6／5

★大丸神戸店美術画廊
川西祐三郎版画展 5／12～5／17
高級茶道具逸品展 5／19～5／24
輪島うるし逸品展 5／26～5／31

★そごう神戸店美術画廊
第11回レイ・クラフト創作ジュウリー展 5／13～5／18
新々作家＜日本画扇面展＞ 5／20～5／25

★三越神戸店アートギャラリー
現代油絵秀作展 5／3～5／15
パリの女を描く坂元淑晃油絵展 5／17～5／22
梅原龍三郎、奥村土牛、荻須高徳版画三人展 5／24～5／29

★さんちか広場
須磨水族館20周年記念展 4／28～5／3
陶芸炎幽会展 5／5～5／10
神戸港開港一一〇年記念展 5／12～5／17
'77燦璨展 5／19～5／24
第8回さんちかビューティフェスタ 5／26～5／31

★ギャラリーさんちか
関西二科写真公募入選展 5／5～5／10
輝墨会展 5／12～5／17
世界ゆうもあ彫塑展 5／19～5／24
半どんの会25周年記念展 5／26～5／31

★KCCギャラリー
兵庫県写真作家協会展 5／8～5／14
森一夫水彩画展 5／15～5／21
みどり会書塾展 5／22～5／28
'77アート・グループ＜見る、見つめる＞展 5／29～6／4

★KCCアートギャラリー
市野弘之・年成親子展（陶芸） 5／2～5／14

希望の方は月刊神戸っ子事務所か、サロン「神戸時代」へご連絡下さい。会費三千円。

★にしむら珈琲北野店

4年目迎え感謝の寄附

宮水珈琲で名高い北野坂にある会員制の〝にしむら珈琲北野店〟（川瀬喜代子社長）が、4月7日に開店4年目を迎え、その日の売上げ金を、元気で働けたことを感謝したいと、神戸市の福祉施設へ寄附。オープンの年から4度目のこの寄附金を神戸市の坂元福祉室長へ川瀬社長が贈呈した。花の4月に心暖たまるニュース。

4月7日の売上げ金を寄附する川瀬社長

★コウベ・ドラマスクール

5月に開校

劇団神戸創設7周年を機に、現代の演劇に誠実に応答しあたらしい演技術の確立をめざすユニークな俳優育成の場として、コウベ・ドラマスクールが開校される。募集要項は次のとおり。

修業年限 1ケ年
定員 20名（男女）
会場 神戸文化ホール3F 会議室
定例曜日 月・水・金（6：00PM～9：00PM）
入所費 ¥10,000
授業料 ¥6,000（含積立費3ケ月前納）
教材費 実費（テキスト・タイツ・シューズ他）

代表は夏目俊二、主事は速水幸一、講師には大川きよし、速水幸一、植田功、榊原大介といった面々。

第一期生を募集中で、問い合せ、申し込みは、生田区江戸町 三共生興スカイビル 802☎392－1664 夏目まで。興味のある方もお立寄り下さい。

花時計

★ある市展の軌跡

芦屋市展が30回目を迎える。昭和23年、ほとんど焦土の中から展覧会が始められたことになる。

しかも、その歩みのなかから素晴らしい作家が輩出し、ひとつの美術運動としての軌跡を描いていることも見逃せない。

特にこの市展の中心的存在であった故吉原治良氏の熱意がうかがえる。

いまもその運営については芦屋市美術協会がリーダーシップをとり、芦屋市が土台づくりをしてきている。これが成功の鍵であったと思える。

運営面を専門家なり市民が担当しソフト面を完全に協会に任せたから一貫した軌跡となったのである。文化行政の好い例だといえる。

だから吉原治良氏の個性が生き具体美術活動につながったのである。

全国的、国際的に活躍する入賞作家をあげれば上田民子、渡辺宏、木梨アイネ、山崎つる子、鷲見康夫、白髪一雄、元永定正、吉原通雄、正延正俊、村上三郎、田中敦子、大原紀美子、名坂千吉郎、名坂有子、前川強、松谷武判、吉田稔郎、上前智祐、今中クミ子、猶原通正、森内敬子、松田豊、河村貞之、原山勝、岡君子、須賀文子、高森陽子、菅野聖子、南節子、向井修二、章本明乎などが挙げられる。菅井汲もこの市展の初期受賞者なのである。

＜Y＞

●KOBE POST

★関西歌舞伎の隆盛をと「**神戸井筒会**」（会長**宮崎辰雄**市長）は実**川延若**丈のファンクラブとして三年目を迎え、三月十二日懇親パーティが生田神社会館で開かれました。舞踊小品二題と、親友のフランク永井もかけつけ大盛況。年会費は個人二万円、団体（三名迄）五万円（事務局／生田神社会館☎321－3851）

★**新日本華道**が50周年を迎え、その「創始50周年のつどい」（家元**西村雲華**）が神戸オリエンタルホテル2F大ホールで5月1日午前11時～午後4時迄盛大に開かれました。

★白鶴美術館に、ここ十年在職された青木重雄さんが三月をもって退職。これからも好きな美術コースを歩みたいとのことです。〒654 須磨区戎町1丁目4ノ20☎（735）二〇〇九

★「青玄」の**伊丹三樹彦**さんは五月より神戸新聞「読者文芸」俳句欄担当。「青玄」は4月に三百号記念として倍大号（150ページ1、000円）を発行。

●日本デザイン協会から、**キングスコート**が建物として表彰されました。

★本誌「女体百景」でおなじみの**細川董**さんが、大阪のギャラリー本田で、4月2日～6日まで洋画展を開き、多才な一面を披露。昨年の「小説女子大学」に続いて、今年は、講談社ビッグバックスより「知的生活のすすめ」を発行されます。

★神戸自動車学院の**谷崎武邦**社長が、3月27日神戸オリエンタルホテルで**安部和美**さんとゴールインし**劇団道化座**ノイエホール（センター街北風ビル5F）5月公演はつかとうへい作「戦争で死ねなかったお父さんのために」演出／**須永克彦**。5月14／21／28（土PM7時）5月／8／15／22／29（日PM2時より）

さんちかタウンでのお食事は、
グループ、家族づれで楽しめる
「蘭免ん」へどうぞ。

和食・麺類

蘭免ん

さんちかタウン味ののれん街 (391) 5358
本店・東京駅前八重州通

ホテルオークラのはす 直営店

日本海直送の

活魚料理

日本海でとれた新鮮な旬の魚を直送便で……その魚を皆さまのご注文に応じて熟練の調理士が盛りつけます。

お1人さま 3,000～6,000円

日本料理の店

婆娑羅

ばさら

電話(078)321—6363
神戸・三宮阪急西口北側レインボープラザ1・2F

〈第一回神戸女流文学賞受賞作品 2〉

ペットの背景

小倉 弘子
え・題字／南和恵

加奈子は一瞬歩みをとめて迷ったが、人通りのある辻までは、まだ百メートル近くもありそうだった。思いきって後に向き直ると、同じように立ちどまった少女に声をかけていた。

「私になにか用事でもあるの？」

少女はその問いに、尖った糸切歯を見せて少し笑った。それから急に加奈子の目の前に腕をつき出すと、口金を摑んだ細い指先をぶらぶら揺って見せた。自分の小銭入れだと気づいて、加奈子はあっけにとられた。

「落としもの。盗んだんじゃないよ」

そういわれれば、肩をはたかれた時に物音がした気もする、と加奈子は初めて折り蓋の開いているハンドバックを眼に入れた。

「礼もいわんと行ってしまう人やから、かめへん、仕返しに貰うてもええねんけれど、そういうわけにもいかへんし……」

少女はそこまでいうと身をよじって笑いだした。変声期の男の子のような乾いた声で、白の透けた歯の裏を覗かし顔を振っている少女を見て、加奈子の頬も笑いに弛んだ。

この子は中身を調べたのだろう。黙ってしまいこむには、あんまり額が少ないので返す気になったのかもしれない。加奈子は改めて少女の全身を観察した。薄いセーターに、鎖骨のくっきり浮かび出ている肩が、まだ前かがみに笑いに波うっていた。レザーまがいの、黒く艶のあるミニスカートが、少しきつそうに腰骨に喰いこんでいる。スカートのせいか、腰から大腿部にかけて流れる線が肉厚に見えて、上半身のか細い印象を眼にきざんでいた加奈子は、ふっと視線を改めた。ちょうどあの時、足音を忍ばせて自分の後を追ってきた感じと、今全身を笑いに弾ませている相手の姿が頭の中で噛み合わないのに似た、かすかなとまどいだった。

加奈子の視線を敏感に感じとった少女の瞳から笑いが消えた。微笑みの影が徐々に淡く頬に広がって、困惑をまじえた不機嫌な表情に変わるのを、加奈子は見てはいけないもののように感じ、あわてて眼を伏せていった。

「そうだったわね。ほんとうにありがとう。ほうっておいたら、首すじにでも這い上がっていたかもしれない。

助かったわ」それだけは本心で、加奈子は先刻の礼を述べた。

「汚なかったんよ。白いスーツの肩に這っている黒い毛虫なんか、とても汚のうて見ていられへんかったんよ」

少女の声が潤んでいた。加奈子は何か忘れていた遠い感覚に触れた気がして眼を瞠いた。まともに斜めの陽ざしに向き直った少女は、自分の内側のものをもて余したように、赤いセーターの双つのふくらみの間に、交差させた腕でハンドバックを抱きこんでいる。夕陽に染めて深くおろした瞼の中が濡れているようで、加奈子は強く胸を突かれた。何を悲しませただろう。

「ほんとうに悪かったわ。ごめんなさい」

加奈子は甦えってきた遠い感覚の実体が摑めぬまま、うつ向いている少女の肩が、濃く降りてくる夕暮れの気配の中で、溶けだしてしまいそうな錯覚を覚えた。その想いが、先刻と違って、やわらかい言葉をかけずにはおれない衝動を、胸の内に呼び起こさせた。

紫の色を着こなせる女はそう数多くない。

小さい時に、母が近所の主婦とそう話し合っているのを加奈子は耳にしたことがあったが、自分が和裁仕立てをするようになって気づくと、その種の色はほんとうに数が少なかった。

地紋のある綸子ちりめんを、古代紫の深い色に染めて、光線の屈折につれて浮き上がり、また流れる大柄な立枠模様を手にとって見ると、どんなに豪華な振袖より、この無地染の方が、着ている娘を晴れだたすだろう。と加奈子は思った。ただ、見も知らぬ年頃の娘は、加奈子の想像の中では、絶対上背のある色白の娘でなければならなかった。現実に、この地を選んだその娘が、無地染の紫を着こなせる自信があったとしても、きものは出来上がりの方が、何倍か華やかさを増すものだった。たいていそれに気押されするものだ。

こんなことを考えるのも、自分の縫ったものが、誰とも知らぬ顔貌の女に着られるのを思い描きながら、針を運んでいる間の、ひそかな楽しみの一つだった。

加奈子は今年に入ってから眼鏡を買った。老眼には早く、その手前の乱視状態だといわれた。かけ始めると、確かに視線を凝らさずに縫い目を運ぶことは楽になったが、その後、何気なしに鏡を覗くと、鼻すじの両脇についた双つの赤い点がしばらく消えないのが、

気になってならなかった。嫌でも年齢を感じさせられるのだ。

テレビを見る習慣を持たない加奈子は、常時鏡台と背合わせに仕事をしている。ふり向くと自分がいる。鏡に映る人間が自分でも部屋の中にもう一つの姿を確かめると、気が休まるのだった。そんな加奈子を気遣ってか、ペット好きの祥二が、一時いろんな種類の生き物を買ってきたことがあった。

せきせいインコや、紅すずめ、熱帯魚。一番長くいついたのは、フイリッピン猿の仔だった。モンと名づけたその小猿は、祥二が家にいる間中は、少しも加奈子に馴れなかった。

自分でも不思議だと思った。別に生き物が嫌い、ということはない。ただ、加奈子が世話するようになると、どのペットも途端に精気を失くするようだった。

そんな危惧が現実になり、一年とたたない間に鳥類は死んでしまい、熱帯魚も一つ一つと減っていった。

最初の紅すずめが死んだのは、それでも祥二が家にいる間でよかった、と加奈子は思った。ところが、彼は妻の前で鳥籠の中を覗きこんで涙ぐんでいた。加奈子はその夫を見るだけで辛くなり、もう二度と生き物は持って帰らないで、と頼んだものであった。

モンを船に連れて行ってくれるように加奈子がいったのも、生物の死に立ちあうのが嫌だったからだった。秋が深まると、モンは寒さに敏感になり、よく風邪をひいた。湯タンポを入れ、毛布を着せ、それでも明け方になると冷えがたまらずに、鋭い悲鳴をあげるモンを、加奈子は懐に抱いて寝なければならなかった。

今はそのモンも、家を離れて船室で暮らしている。猿類は人間に近いといわれるが、ペットとして飼うには、孤独さが身に溢れているようで、嫌だと加奈子は思った。いつだったか、野猿の生態を追ったテレビのルポルタージュの番組があった。

百匹近くの日本猿の群れの中で、母猿に死なれた小さな子猿が、餌を拾うでもなく、遊び廻るでもなしに、ただぽつねんと、水気を脱かれた木彫りの人形のようにうずくまっている姿を、テレビカメラが写しだしていた。

いくらの金で買ったか知らなかったが、もうその時は船に帰ったモンを想い、加奈子は祥二を腹の中で小さく罵った。

モンが家に来た時、すっかり怯えきって、加奈子の腕の中で失禁したのを、祥二は躾けなければならないと、こぶしほどの小さい頭に、平手打ちを喰わしたものだった。モンは金属的な悲鳴をあげて祥二の胸に飛び移ると躯を丸く縮こめて彼のセーターに縋り、二の腕のうぶ毛をむしっては口に運んだ。それが群れで一緒に暮している折の、肉親に対する愛情の表現の習性であることを、加奈子は知っていた。眼を細めて、どうや、という顔つきをして見せる祥二の表情とは裏腹に、加奈子の心の中に、モンの孤独さが、こっそりと嵌まりこんだ。

そう思えば、と加奈子は記憶を近くへ手繰り寄せた。二日前に逢ったあの少女にも、よく似た雰囲気があった、と思った。

「あたしね、おばさんの第一印象、見そこねてたみたいやわ」

帰りの電車の中で、智世と名乗った少女はそんな言葉を吐き、加奈子を苦笑させた。

同じ方向へ帰るという智世と、環状線での電車のシートに腰を並べて、加奈子は年配の女らしく、相手の生活の背景を、それとなく聞きだそうとしていた。

年齢は十八才で美容師の卵。今住みこみで働いている。わかったのはそれぐらいのことであったが、加奈子は奇妙な印象のこの少女と、何の関わりも持たぬ自分が、言葉を交わしていること自体、普段の性格から思えば突飛なことに思えて、すぐ口をつぐんだ。ところが、智世は逆に加奈子の周囲を聞きだしにかかった。当らず障らずの返事を返していた加奈子が、考えるいとまもないぐらいに話しつづけて、顔を覗きこんでくる相手につられ、

祥二の職業や住所まで語っているのに気がついた時、智世は一時間前の肩をすぼめた静物のような、躯の表情をすっかり忘れきっているように覗えた。それでも語尾に力を入れる掠れた声が、何か気負いを秘めている気がして、加奈子は気味が悪かった。

「そう、そうしたらおばさん、いつもひとりきりやの？今度遊びに行ってあげようか？」

高い声でそういわれて、加奈子は笑いながらも迂闊にうなずいた。すると智世は何思ったか、加奈子の肩に頬を寄せてきた。小造りな顔の輪郭が、閉じられた眼の為に希薄な印象に変わり、淡い陰影を漂わせていた。安堵感に浸っているようなあどけない表情が、自分の肩にもたれて揺れているのを見て、加奈子は今日の自分の外出の目的がこの少女に逢うためであったような、おかしな錯覚を味わっていたのだった。どうしてあの娘が、自分に興味を持ったのか。加奈子自身にはわからなかった。ターミナルの人混みの中で、一度は背を見せながら、すぐふり返って、次の休日に遊びに行く、といった智世に、加奈子は笑顔で手を振った。だが、今はどうせあの場限りの、気まぐれだったのだろう、と相手の心をおし測っていた。

同色の濃淡ぼかしの裾廻しは悪くない好みだと、加奈子は縫い合わせた表地に八掛の地を添えてみた。嫁入り支度に揃える衣装でも、本人は数ある反物の中から選びぬくのだろうが、常に和服に眼を向けている人間に、急場にしか着ない女とでは、選ぶ柄ゆきも地質も、根本から違っていた。大柄な絵羽模様の振袖は仮縫いがされていて、仕立てるには気が楽であったが、いかにもイージーオーダーの匂いがする。それでも価格にすれば、祥二の給料以上はするのだろう、と加奈子は仮縫いの糸の解かれていない、衣装の衣桁を眼に入れた。クリーム地に茶屋辻模様の柄づけの朱と紺が、古びた衣桁を彩ってい

る。あの子に似合うのはどちらだろう。加奈子はふと、またあの奇妙な娘への印象に捉われていた。

加奈子が忘れかけた頃になって、その智世が現われた。

ある朝、玄関の戸の開く音に加奈子は腰を浮かしたが、日もたっていた頃であり、智世だとは思わなかった。

三和土の真中につっ立って、

「こんにちは」

と智世は歯切れの良い挨拶をしたが、姿勢は固くなっているようで、両足を揃えたままだった。加奈子は少し狼狽していた。折悪しくといおうか、内地の各港に寄港して来た祥二の船が、神戸港で三日間の掟泊をすることを知らせてきた。今夜遅くにでも、帰れたら帰る、という電話で、加奈子は手持ちの仕事を急いでいた。が、折角訪ねて来たものを、無下にも返すには、曖昧にしか取られかねない口実だった。そんな加奈子の思惑の表情を智世は敏捷そうに光る眼で見つめていた。

とに角上がらせよう、と加奈子は心を決めた。思いなしか、戸口の白光を背に浴びて黙りこくっている智世の影が、頼りなげに眼に映っていた。

「さあ、上がんなさいよ。どうしたの」

「ほんとうに上がってもいい？」

と智世は疑わしい目つきをして見せた。

「そのつもりで来たのでしょう」

「そりゃそうだけど」

智世はそういいながらでも、照れたはにかみの眼の奥で、加奈子の顔を嬉しそうに見上げ靴を脱ぎ始めた。

卓袱台の上にケーキ皿を置きながら、加奈子は妙に自分が浮き立っているのを感じた。

珍しい年若い客のためだろうか。それとも、祥二が帰宅することへの期待だろうか。どちらも当っている気がするけれど、祥二が時間の早い帰宅をした時など、今の智世がいるように、卓袱台の向こうに坐っていられると加奈子の動作はぎこちなくなった。祥二の沈黙が加奈子の躯を熱くした。そのくせ、心の片隅で加奈子は不思議さを味わっていた。

まったく離れた生活を送っている夫婦の仲で、ある日予告もなしに夫が帰ってくる時がある。港から電車で、あるいはタクシーで、一直線に妻のいる自宅に時を急がせる。

当然でありながらおかしい、と思った。巣を造りあった男女が、一人は暮しの手段に家を離れ、残った一人は樹木の枝から巣を落とさないように、風を雨を避けて囲っている。

それを繋いでいるのは、性の部分が大半を占めているのだろうか。

離れているからこそ、かえってその希求が強いのは、人間の本性にもとづくものだろうけど、自分達の場合は子供のいないせいもあり、日常動作と夫婦の行為が、一定した時間でくっきり区切られてしまう。

夫の眼に滲んでいる、奥深いきらめきを全身に感じながら、加奈子は息を凝らすような面持ちで食事の支度の一つ一つを確かめ、潤んだ感情の片隅の、妙に白んだ空白の翳りを自覚したりするのだった。

「なにを思い出し笑いしているの？」

いつの間にか崩した膝で、智世はふざけ半分に加奈子の傍に寄ってきた。

あの時と同じに、剃り後の喰いこんだ衿足が青っぽくて、細い首すじが少年じみていた。

「笑ってた？　いいえ、そうじゃなくてね、駅からここまで来るのに迷う人が多いのよ。それなのに、あなたはよく来たなぁ、と思ったの。よっぽど私に逢いたかったのかしら」

加奈子はつられて軽口を叩いたが、本心でもあった。その気持が相手のまなざしを窺わせた。智世はケーキのフォークをとめて、瞬間固い表情を浮かべ、黙りこんでいた。

（つづく）

ニュース漫画を描き続けて7000回〈20年〉

〈神戸新聞“笑点”〉

たかはしもう笑品集

発売中

●田辺聖子さん激賞

「孟さんのマンガの特徴は、第一暖かいところがよい。

時として彼の時事マンガに、するどいブラックユーモアがあって、よく諷刺がきいているが、それとても次の瞬間、ニヤリとさせるところがある。私はこれは、古川柳の味わいで、こういうのこそ、オトナの笑いというものだろうと思う。孟さんの人生キャリアが出てくるためで、こういう味わいは、老来ますます冴えるはずだ。これからの孟さんのマンガがたのしみになるゆえんである。」

★内容
「最新カラーマンガ」 ―― 9頁
「笑点20年」 ―― 36頁
「似顔絵100人」 ―― 54頁
「ニュースマンガ家の一日」 ―― 4頁

¥2,500（送料200円）

お申込み「たかはしもう出版会」

神戸市生田区東町113ノ1 大神ビル7F　月刊神戸っ子編集部　TEL (331) 2246

送金方法　太陽神戸銀行三宮センタービル支店普通預金 1152704「たかはしもう出版会」

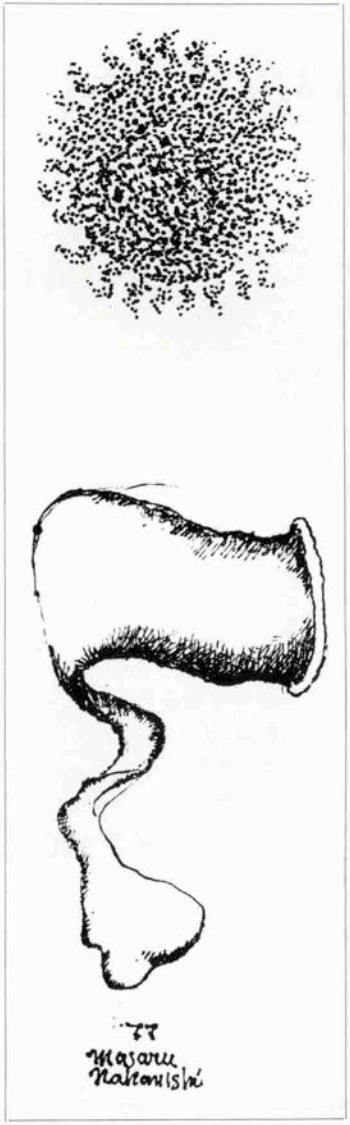
または月刊神戸っ子あてに現金送金ください。

□第1回 神戸文学賞受賞作品

連載 5

島之内ブルース

田靡 新
え／中西 勝



テントで一夜を明かした川島くんは、六時半のラジオ体操で元気なところを見せ、その足で牛乳配達にとびだす。炊きだし弁当でやってきた婦人たちは、手芸や内職のフラワーデザインを持ち込んできた。ケッサクなのは誰が斡施したのか、輸出用男性スキンの箱詰め内職だった。この話は老人たちにも歓迎され、またたくうちに人出を呼びこんだ。テントでは間にあわず、工事現場から払下げた六畳プレハブが建てられる始末だ。

「島本はんか、ええもん探してきはりましたな」

「ワシは前から、これ専門でんがな」

ばあさん連中も手馴れたもので、半ダースづつ銀色に包みこんだスキンを化粧ケースに詰めてゆく。

「外人のは、なんや大きいな」

「そりゃ、あの丈やからな。持ちものもぶらぶらしているんやろ」

それを聞き耳していた沼田のおじいさんが、入歯をも

ぐもぐさせながらいう。
「もうワシには用はないんやがな」
「おじいさん、ちょっと当てがってみなはれ」
「立たんやろに」ばあさん連中が笑う。
「うちが、手をかしてあげよう」ばあさんが、あっぱっぱの前をめくる仕種をする。内職の連中がどっと笑う。
「これ、午後の部のホステス組にやらせたらどうやろうな」
「品数が足らんようになるわ」また笑い声だ。
「午後の時間割をどう決めるかな」
島本さんが、ビラを窓枠にはりだしている。真昼の純情サービス。ビール持ち込み自由。おさわりOK。ただし指はあきまへん。
「人権問題やな。日当出すのか」
「あほぬかせ。そんなもんでるかい。花代はいくらでもよし。つまりカンパを取るのや」
「そんなんで客がくるやろか」
「遊びやないで。坐り込みの大義名文があるのや」
「花屋など午後はヒマや。いちばんに飛んでくるわ」
「あいつ舌でなめまわすやろな」
沼田のおじいさんが、若い二人にいう。
「お前らで、漫才を聞かせる会がつくれるな」

市の計画では梅雨あけと同時に橋脚工事の測量着工に踏切る腹づもりだった。しかし、堤防きわの住民たちの実力阻止にあい、その測量も実施できないまま、河川敷内の不法建築物をどう排除するか頭をかかえていた。工事はいつからでも掛かれるように、向う岸には、双眼鏡でテント内を監視するクルマが毎日やってきた。
七月も中旬を過ぎると三〇度を越える暑さがつづく。川の黒い淀みが、いっせいに泡だつ。プレハブの団結小屋は、トタン屋根が焼け、まるでフライパンのなかと同じ。朝夕以外、内職のおかみさんたちはテントに逃がれ、箱詰めの円陣をはる。橋反対の立看板がなければ涼みながら内職をしているように見えた。川の面を渡る風は臭い。斎場の異臭も彼女らのマヒした鼻には臭わない。
ある日、近所で見かけない男ふたりが、カメラをぶらさげ写真を撮りにきた。異変の合図でドラム缶が打たれ、反射鏡でことを知った親父が駆けつけてくる。男は何者か、誰に頼まれたかの問いに黙秘を使う。フィルムの抜き取りをエサに暴力の誘発をしているのは明らか。こちらもカメラを持ちだして指一本触れずに、相手の鼻づらにシャッターの雨を。
「また、気が向いたら気軽にきなさい。キミの大将に、こちらはみな元気でやっていると、よろしく伝えてくれよ」と親父があしらう。
「さあ土産に、このスキンをあげよう。みんなで今夜にでも使いなはれ」
おかみさん連中がどっと大笑い。男たちは、そそくさと背広姿を堤防の下へ引きかえす。
午後のホステス組は二人。頭にヘアクリップを付けたままネッカチーフでまるめている。化粧のない顔はサングラスを離さない。内職のバアさんたちにも、話を合せるから賑やかだ。ホステスたちは、初め週刊誌を見たり縫ものをしたりしていたが、そのうちトランプや花札をはじめる。しかし、これは週末に制限される。彼女らは、人数が多いので一週間に一度の割だ。客の方はというと案の定、花屋が牛乳屋を連れてきた。その後、ヒマを見て肉屋も靴屋も喫茶店代りにとんでくる。みんな顔なじみらしい。ビールの差入れで、そのおこぼれがバアさんらにも廻ってゆく。
なんや、酔いが早いな。こう開け放しだと手がでんな。ここは舌や目やないとあかんのよ。下はええのか。口のことよ。口は固い方やけど。昼は気分が乗らんな。そやから夜に店へきてほしいのよ。高いがな。映倫をゆるめよか。眺めるだけにしたら。それやったらストリップやがな。
その頃、沼田のおじいさんがジャリ運搬船を払いさげ

て、河口から曳航してきた。渡し舟を考えついたのだ。団結小屋にまた名物がふえた。おかみさんたちの話題は、渡し舟に変っていた。

「島之内の遊女舟だね」

船底に板が打ち付けられ、日覆いがはられる。川の両岸に梯子を設ける。一日に数回、内職の休憩を兼ねた渡し舟は、川向うの斎場と墓地を見物して引き返してくる。

「川がきれいで、臭うなかったら、三味線でも入れて舟遊びができるのにな」

沼田のおじいさんは、昔を懐しむようにいう。

「きれいな、元の川に戻るのに百年はかかるといわれていますね」

親父に代って川島くんが櫓を漕いでいる。

「私の子供のころ、母親がこの川で米をといでいたもんだ」

「まったく想像もつかないですね」

「いまじゃ、川が墨汁を飲まされ、泣いていますのじゃ」

「つまり、その怨みつらみでガスをぶっとばし、人間が河に復讐されているのですね」

町内の人が、物珍しく渡し舟にひと通り乗ると、あとは関心が薄れた。親父の渡し舟に毎回つきあっていた沼田のおじいさんが、メタンガスにやられ、二、三日寝込んだ。暑さもこたえたのだろう。それでも親父は、朝の運動を兼ねて舟を漕いだ。

「舟がでるぞ」

親父は、夜番と朝方の交代の時刻に必ず舟を操り、人が乗っても乗らなくても、堤防に向って叫んだ。ボクは裏庭から下駄のまま堤防に駆けのぼる。ラジオ体操が終ったらしく、川島くんが牛乳を差入れにきている。彼は三日置きに泊りを引受けているのだ。ボクはコンクリートの階段から梯子段を下りる。舟の上から見あげていた親父が「お前か」とひとこと呟く。

「ゆうべは、蚊の大群に襲撃されましてね」

「蚊でよかったですね」

「みんな雌の蚊ですよ」といって、川島くんは笑う。笑顔にまぶしく朝陽がはじける。胸をはり、両腕をひろげ深呼吸をする。

「やっぱり、いささか寝不足だな」

川島くんが、牛乳びんをさげたままボクにつづいて下りてきた。梯子段から舟へとび乗る。

「今朝は、ボクに漕がしてくれ」

親父はあっさり、櫓をボクにまかせる。櫓を握り力いっぱい水をはじく。水面を飛沫が走る。舟はびくともしない。櫓を手もとに早く曳きすぎたのだ。親父は再び堤防に向って叫んだ。

「舟がでるぞ」

親父の声は高い堤防に遮られ、川の面に吸いとられる。親父はボクの櫓の使い方をしばらく見ていた。やがて習字の手習いのように櫓を握ったボクの背中から掌を重ねてきた。煙草臭い。櫓の操り方と力のバランスが掌に移ってきた。舟はようやく岸を離れる。ボクは、向う岸までなんとか辿り着きたかった。ボクの腕は、それでもときどき空廻りした。力がうまく櫓にかみあわない。

「8の字を描きながら、手前に引くときに、やや力を入れるんだ」

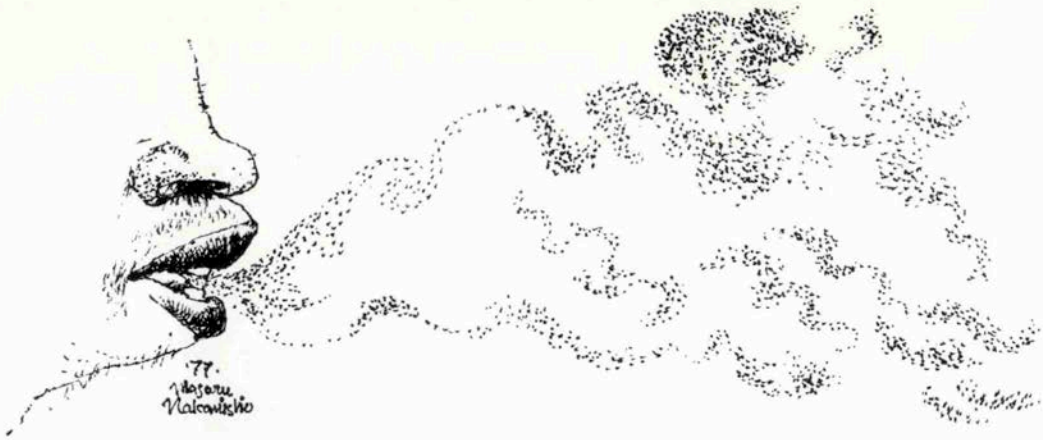
親父は気になるとみえて、ボクの手もとを見ている。

「もっと肩の力を抜いて」

ボクの躰はすでに汗をふきだしている。川の面は、油のようになめらかにうねりはじめる。舟べりが、その油のなかをすべってゆく。川の悪臭は、朝の冷気のためにか、あまり臭わない。いまは、ボクの吐く息の方がくさいかも知れんな。舳先に坐った親父が牛乳でひと息入れている。

ボクはふと、今朝のことを想い出す。今朝はめっぽう早く起こされた。電話の主は清ちゃんだから仕方がないが。

「朝早くからごめんなさい。とても緊急のことなんだけど、いますぐ駅裏のガード下まで来てほしい」と内容は



会ったときにだと、こちらの意向など聞こうとしない。かなり急いでいることは判る。何か清ちゃんの身辺に事件が起ったのだ。とりあえず顔だけ洗って出かける。日曜日で、街の人通りは、ほとんどない。ガード下に二、三人の、それも清ちゃんと同学年の男たちばかり。かんじんの清ちゃんの姿は見えない。近づくボクに、それでも先輩を迎える礼をつくすのか、背の高いのが、走ってきた。

「要件はなんだ」

「簡単にいえば、清ちゃんにカンパをしてほしいのです」

「何に使うんだよ。それに本人が呼びだしておいて、居ないのも気にくわねえよ」

ボクは眠気をはらうように強がってみせる。

「おろすんですよ」

何のことか、サークル部から除名のことかなと思ったが、瞬間堕す意味が判明する。

「俺には関係ないじゃないか」

「そういわれれば、全くしょうがないけど」

もうひとりがいう。

「何かと親しい仲間うちだけでも協力してもらえないかと、先輩らをリストアップしたんです」

「冗談じゃない」

ボクはつとめて明るく笑ったが、心が痛む。それを、いかにも気づくかのように、さっきの男が、同じことをくりかえす。

「しかし、清ちゃんが自ら指名したんですよ。もちろん、家族には内緒で、この秘密は守ってくださいね」

「俺はあいつと寝た覚えはない」と喉まで込みあげる言葉を飲み下す。後輩らといっても顔見知りの程度を出ない。こちらは一浪の身だ。早くこの場を避ける方が得策だ。

「俺から本人にカンパを手渡す」

ボクはこれだけをいい残すと背を向けて歩きだした。背の高いのが、ボクを追いかけてきた。一口。これ以

上ですと指を一本指しだすと頭をぺこんとさげた。ボクは胸さわぎを沈める方法が思いあたらない。下駄の音をやけに高めて歩きつづけた。駆けだしたい気持だ。

波のようにうねった低い道路から、トラックがスピードをあげて視界をふさいだ。

「危いじゃないか、どあほ」

運転手はタオルでねじり鉢巻をしていた。道路の真中に立ち止ったボクに罵声をあびせた。排気ガスのたちこめる坂の向うに、早くもかげろうが湧きクルマが泳ぐように連なっている。

『来年の春までよ、あと十カ月もないわ』

清ちゃんと喫茶店で別れたときの言葉が、またしてもよみがえる。待てない事情が、あった。不意に。ボクの想像外のところで。ボクは清ちゃんの家に行ってみようかと、ふりかえった。屋根の向うの大樹に朝陽が降りそそいでいる。泣けてくるな。あんなに樹は、さわやかだというのに。こんもりした大樹が、いっせいにざわめくのが見える。風もないのに、不意にボクに何かを語りかけるようにだ。朝陽が葉の繁みに吸いよせられている。緑の一枝一枝が、眠りから覚め、あたかも寝返りをしたり、伸びをしている子供のようだ。みどりのひかりが、まぶしくあたりにひろがったり、すぼんだりしている。深呼吸をくりかえているのだろうか。

ああ、もらしそうだ。空は晴れても、心は闇か。実際、ボクの見あげる空は晴れてはいるが、すでに灰色のスモッグが、海の上にのさばっている。それだけに葉先にしたたるひかりの粒が、いっそうしなやかだ。

ボクは一瞬、抱きつきたい欲望にかられる。力いっぱい射精していいかい。ボクの熱いものを吸っておくれ。

「若いから飲みこみが早いや、ちょっとテンポが早すぎるんだね」川島くんは、さっきからボクの櫓さばきをじっと見ていたのだろう。

「着岸のときは、手伝ってあげよう」

ボクは笑を返そうとしたが、顔がこわばっていた。掌が厚く感じられる。もう掌にマメができたらしいのだ。

「ああ、遅すぎた」

ボクは、大声でわめいた。

舳先がコンクリートの壁に激突した。親父はあっけなく舟の上にころがった。川島くんは、ボクの手に櫓を押し戻し、親父の方へ駆け寄った。

「気をつけんか、馬鹿たれ」

親父は、うめくようにいって顔をしかめた。ボクは慰めのことばをかける気もなく、舟を岸につけることに夢中になる。掌のマメが痛い。

「父さん、あと何日つづけるつもり」

「ワシの気がすむまでじゃ」

「ボクもこれから、時どき手伝いにくるよ」

親父の返事はなかった。川岸に影を落とす高速道路は、ひきもきらないクルマの通過音に反響している。風にうなるエンジン。道路を打つタイヤの音、マフラーをふるわす排気音が、厚い帯状になってひろがっていた。パイプのなかを水量がほとばしる音にも似ている。轟きわたる風がぶつかりあっている。燃えさかる炎の音もまじっている。それらの濃密な騒ぞうしさが、幾層にも重なっていた。空にくわえられている反響音が、雨と同じように降りかかってくる。斎場の煙突からは、黄色くにごった煙がなびいている。煙が黒いほど若い人や。黄色い、うすい色は、年寄りやて、脂肪の量がちがうからや。

島之内では、鼻や耳がいうことをきかなくなったと自分のことを笑ってしまう老人たちが、また何人かふえていた。

（了）

〈編集部より〉

「島之内ブルース」分載は今月号で完結しました。来月号からは同じ作者で書き下ろし七回連載「シール・ブラウンの神々」が始ります。作者のインド旅行での体験が核となった男女の愛の苦悩がテーマです。さし絵は行動美術の松本宏先生。ご期待下さい。